

国際的な人になろう

Be an international

大阪市大工 °呉 準席

Osaka City Univ. °J.-S. Oh

E-mail: jsoh@osaka-cu.ac.jp

演者は韓国ソウルで生まれ育ち英語が母国語 (mother tongue) の人間ではありません。皆さんと同様に中学から大学まで 10 年近く英語の教育を受けても英語が上手く喋れない人間の一人でした。しかし今は誰より国際交流ができるような研究者と見られているようで、このような機会を頂いたと思っています。

演者が思っている研究分野における国際交流とは、国内の限られたマンパワーを効率よく活用して最大の研究成果を残すために必要な手段であると認識しています。自分の大学院生の頃を思い出すと、当時は研究の仕組みをよく考えずに自分に与えられた目先の課題をクリアすることで精一杯でした。現在、学生の皆さんも私が学生の頃と変わらないのではないのでしょうか。研究の仕組みに関して教えてもらう機会が十分あった人は何人いるのでしょうか。また、自分が行っている研究に関してどのくらい時間を使って悩みましたか。

将来大学や企業で研究者として活躍したい皆さんは、当然国内から海外へ視線を移すことになるでしょう。そしてその時にはコミュニケーションの手段として英語が必要となるでしょう。本講演がそのための刺激の一部となることを願っています。

本講演は、応用物理学会 (The Japan Society of Applied Physics) 及びプラズマ分科会 (Division of Plasma Electronics) の学部生から大学院生までの学生会員を主な対象としています。そして国際交流の必要性とそのために必要不可欠である英語に関して講演者の経験を下記三つの話題に分けて語ろうと思います。

1. 学生時代英語が喋れるようになったこと。そして恩師との出会いと日本への留学
2. イギリス留学時代実感した自分の英語の能力の低さと恥ずかしさ
3. 国際交流で必要なのは英語の能力だけではない